

北区の店主【完結】

畑渚

ロランドハリヴェールは買い出しの帰りになにかを見つけた。それはいわゆる、戦術人形と呼ばれるものだった。

目次

1	・ 出逢い
2	・ 店員
3	・ 休日
4	・ 人違い
5	・ 終了

1. 出逢い

今連載中のもう片方とは雰囲気の違いすぎるかもしれない問題

ロランドがそれに気づいたのは偶然であった。それは遠くの町まで材料を買い出しに行った帰りだった。道端に倒れている人影を見たのだ。

「おいおいまじかよ！」

すぐに車を停めて駆け寄る。近づくにつれて、それが少女であることが分かった。

「大丈夫ですか！もしもし!?」

少女の肩をたたくも返事がない。仕方なくロランドはうつぶせになっている彼女の身体を仰向けにする。

「なんて美しい人だ……っと呼吸確認！」

ロランドは胸の動きを見る。

「う……動いてない……死体？」

顔から血の気が引き、後ずさる。すると、何かを踏んづけてしまい恐る恐る足元を見た。

そこにあっただのは銃だった。まともに知識もない彼には、それが拳銃でもなくライフルのようにスコープが付いているわけでもないということしか分からなかった。

「……なんだ、戦術人形か」

ロランドは冷静になる。動かなくなった戦術人形が転がっていることは、よくあることだった。彼は少女へと近づき、全身を見回す。黒いパーカーに緑のスカート。黒いタイツの上からベルトでそのきれいな足を締めつけている。目は閉じてしまっており、髪は茶色でツインテールにしている。

「民生用なら首元にスイッチがあるんだっけか？」

少女へとゆっくり近づき、首のバンダナを外した。そこには細い首があるだけだ。だめかと思った瞬間、手が首に触れた。すると見えなかった継ぎ目が見え、横にスライドして開いた。

「うおっぴっくりした。最新のはこうなってるのか、知らなかった。ここを押せ

ばいいのかな？」

開いた部分から手をいれて、スイッチを押す。どうやらちゃんと起動したようで、スイッチの近くのランプが点灯した。しかし、ランプは黄色で点滅している。どうやら正常な動作をしていないようだ、機械に詳しくないロランドでも理解した。

ピロピロピロピロ

突然、ロランドのポケットの中から音がする。それは電話の着信音だった。

「はいもしもし、はいロランドです。はいご注文お受けいたしました。受け取りは？はいわかりました。ありがとうございます、では失礼します」

ロランドは電話を切ってポケットにしまうと、車へと戻ろうとした。しかし、もう一度少女の方を見た。

ロランドの車に、物言わず動かぬ乗客が加わった。

※※※※※※※※

「娘さんのお誕生日ケーキでしたね。準備できていますよ」

「ロランドさん、ありがとうございますね。あなたが居てくれるおかげでこんな日でも困らずに済むわ」

「ありがとうございます。僕としては競争相手がいないというのもつまらないのですが、まあこの時代ぜいたくは言ってもらえませんか。はい、どうぞ」

「またくるわ」

「ありがとうございます」

調理場の方へと入って、ロランドは外向けの笑顔を解除する。といっても彼の表情は元から常に笑顔で、本人以外はそこまで変わっていないと思っただけです。

「さて、今日は店を閉めてこの子をどうかしなくちゃかな」

ロランドはとりあえず椅子に座らせた少女を見る。未だ彼女は動かさず、首元のランプも点滅したままだ。

「そういえば常連客に詳しい人がいたはずだな。明日来たら聞いてみようかな」
エプロンを脱いで、店先のシャッターを下ろす。ここは彼が一人で切り盛りして

いるパンとケーキの店だ。この街にはこの店しか存在しないため、意外と人よりも儲けていたりする。

「おやすみ」

少女に一声だけかけてから、ロランドは調理場の電気を消した。

その夜だった。ロランドは視線を感じて目を覚ました。そんなはずはないと再び目をつむるが、その違和感がぬぐい去ることはなかった。

「ああもう！明日も朝早いんだぞ！まったく僕は臆病なやつだ——」

ロランドが身体を起こし、寝室の入り口に目を向けたときだ。人型の何かがそこに立っていた。そんなはずはない。ここは彼の店兼住居で、彼以外に住民はおらず、泥棒が避けるような強固なセキュリティで家は守られているはずだった。

「ぎゃあああああ！」

ロランドはとりあえずつかんだ枕を投げつけた。しかし、人影は投げられた枕を見事にキャッチする。

「H A H A H A ! ナイスキャッチだね! …… ってやっぱ無理、怖い怖い!」

情けないことに、彼はこの歳になっても幽霊を怖がる臆病者であった。危機感があるということは悪いことではない。むしろこの動乱の時代では生き残るためのスキルだ。しかし、彼は少しそれが過剰なようだった。

ロランドは窓を開けて飛び降りようとする。ここは二階であるからそこまでひどいけがはしないだろうという算段である。

「待って ! 私はあるあなたに拾われた人形だよ!」

独特なウイスパーボイスがロランドの耳を突き抜ける。聞いているだけで癒やされそうな声は、彼を振り向かせる効果を持っていた。

月明かりで少女の姿が浮かび上がる。飛び降りる彼を見て驚いた表情を浮かべた顔は傷一つなく、ロランドはとても美しいと感じた。

2. 店員

結局あのあと、ロランドは少女を寢室に閉じ込めて自分は店のベンチで寝転がっていた。人形とは言え、紳士の血の流れるロランドには美少女を無視して自分一人でベッドに寝ることはできなかつた。ついでに言えば、彼に美少女と一緒にベッドで寝るほどの度胸もなかつた。

寝心地の悪さを嘆いていれば、時計の短針が4のところへ着いてしまった。彼の起床時間がきたのである。

ロランドは起き上がると、シャワーを浴びた。お風呂が好きだと豪語する彼は、夜には湯船に浸かり、朝にはシャワーを浴びるという日に二回も風呂場にお世話になるような人物であつた。

シャワーを浴びたあと、彼はタオルを腰に巻いたまま牛乳を一気に飲み干す。風呂上がりの冷たい飲み物は、彼のほてった頭を冷やした。

そういつてロランドは調理場の扉を開いた。

「あっおはよう！」

ロランドはそつと調理場の扉を閉め、鍵をかけた。

※※※※※※※※

「ロランドさん！ちょっとひどいんじゃない!?!」

少女はふくれっ面をしながらロランドへと抗議する。そんな顔も美しいなんて頭の中で口説きながらも、ロランドの表情は硬いままだ。

「いやっあのっちょっ近いつ」

ロランドは残念なことに、女性への対応力は低かった。もし祖先がこの場にいれば、本当に同じ血が流れているのか裁判行われそうである。

「それで、僕は君のことをなんと呼べばいいのかな？」

「えっと個体名はu m p g なんだけど、本物ではないし……」

「本物じゃない？ どういうことだい？」

9の言葉にロランドは首をかしげた。彼はただの一般人であり、ダミーリンクシステムなどという軍事機密を知る由もなかった。

「簡単に言うと、私には命令する素体がいるはずなの。でもなぜだか通信が切れてて認識できなくて」

「じゃあ道端で倒れていたのもそれが原因？」

9はうなずいた。ロランドは腕を組んでしばらく考えた後、顔を上げた。

「じゃあノーヴェエでどうかな？僕はロランドでいいよ」

「ありがとう！これからよろしくねロランド」

ノーヴェエが右手をロランドの方へ伸ばす。それが握手だと気づくのに少し遅れたロランドは頬を赤らめながら右手を差し出した。

||*||*||*||*||

「ねえロランド、私もお店を手伝わせて？」

「いいよそんな。くつろいでいいよ」

ロランドは決してノーヴェの申し出が嫌だったのではない。むしろうれしくらいだった。しかし、ノーヴェはその意図をくんでくれなかった。

「私に退屈で死ねっていうの？」

見事にふくれっ面である。そんな顔もすてきだぜ、と心の中で唱えながらロランドは謝る。

「ごめんよ。じゃあお願い」

ノーヴェはその言葉に満足そうにうなづいて、服の袖をまくった。

「じゃあ何からすればいい？」

「じゃあ……とりあえず店の掃除を」

「了解！ 任せて！」

しかし、ノーヴェが動き始める様子はない。

「ど、どうしたんだい？」

「掃除用具ってどこにあるの？」

ロランドは肩に入っていた力が抜けるのを感じた。

||*||*||*||*||

「いらっしやいませ〜」

「あら？ ロランドさんだったらいつの間にかこんなべっぴんさんを捕まえてきたのかしら？」

「べっぴんさんだなんて〜そんな〜」

ロランドは店の奥から表の方をのぞき込んでいた。始めは人形なんて思っていたが、ノーヴェの評判は良かった。彼女の容姿は常連の口から賛美の言葉を引き出し、道行く人を引き止めた。

「ねえロランド！ チーズケーキがもうないよ！」

「えっ！ 今日は何っこう多めに焼いたんだけどな……」

冷蔵庫を開けてみるが、作り直すための材料はない。

「しょうがない。今日はもうチーズケーキはおしまいだ」

「声が小さくて聞こえない！ それとタルトもなくなったよ！」

ロランドは動きが固まる。

「ロランド！もう商品ないよ！」

手に持っていたボールを床に落とした。大きな音が店中に響いた。

「ちょっと何！敵襲!?!」

ノーヴェが調理場に飛び込むと、そこには茫然自失となったロランドがいた。

「ロランド！ロランド！」

3・休日

それから数日間、ロランドは今までにはない忙しさを経験していた。ノーヴェはその綺麗な容姿で店に人を引き込む。そうしてホイホイ入ってきた連中は、ノーヴェの独特の人懐っこさにあてられて財布の紐を緩めるのだ。

「おはよう、ロランド！」

「おはようノーヴェ」

ロランドはベッド代わりのソファから起き上がる。顔を覗き込んでくるノーヴェの笑顔で乾いた目を癒しながら、今日やることを頭の中でリストアップしていく。

「今日は休みにするんだよね。何をするの？」

「買い出しと……新しい商品でも考えてみようかな」

ノーヴェによる販売効果が得られている今であれば、多少失敗しても元は取れそうだとロランドは考えていた。

「買い物かぁ。私が行くのは初めてかも」

「えつついてくるの？」

「えっダメなの？」

二人の間を沈黙が通り過ぎる。

「あっえっと、じゃあ一時間後くらいに出るつもりだから」

「了解！」

ノーヴェは寝室から出て下の階へと走りながら降りていった。

「人形とはいえ女性と二人で買い物？これってデート？やばいどうしよう初めてだ」

つくづく女性関係に対して残念なロラントであった。

||*||*||*||*||

「綺麗な街だね」

ノーヴェはキョロキョロとせわしなく目を動かす。

「ずいぶん昔の町並みを再現してるらしいよ。戦争でほとんどが失われてみたい

「ここは珍しいらしいよ」

「ふーん。昔の町並みか。確かにビルが乱立してるような街からここに来たらタイムスリップしたんじゃないかって思うかも」

ノーヴェは何かを見つけて走り寄っていく。

「見て見て！クレープだってよ！」

「おっ嬢ちゃんお目が高い！買ってくかい？」

「じゃあ一つ……いや二つお願い！」

「あいよ毎度あり！」

ロランドが追いつく前にノーヴェが注文を済ませてしまった。

「あのなあ」

「いいじゃん！これも新商品開発の一環だよ」

「まあいいけどさ。お代ここに置いておきますね」

「あいよ……ってロランドの旦那じゃねえか。いつも世話になってるぜ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「うちの娘がおまえさんとこのパンの大ファンでな。しっかし女っ気がないと聞

いていたのにいつの間にこんなべっぴんさん捕まえたんだ？」

クレープ屋のおやじはクレープを手渡してきながらそう言った。

「ノーヴェは人形ですよ」

「ほお、最近の人形はずいぶん精巧なんだな。俺が子供の頃なんか最先端の技術でも人間の形をした何かしか作れなかったってのに」

「まったく、どうしてここまで人間に似てるんだか。口説く相手を見分けるのに苦勞しますよ」

「ロランダの旦那は口説く勇氣もないだろ？」

あつはつはと二人は大声で笑う。そんな様子を見てノーヴェは自然に笑顔を浮かべた。

「おっと引き止めちゃったな。今度はそっちの店に顔を見せるよ」

「はい、お待ちしていますね」

クレープ屋と別れてからしばらく歩く。目ぼしい店をウィンドウショッピングしながら二人で歩くのは楽しかった。

「おっと、すみません」

少し狭い路地を歩いていると、ロランドがぶつかってしまった。ロランドは違和感を覚えた。当たった感触は金属だが、見た目は人である。

「いえ、こちらこそ……」

黒いフードを深くかぶっている人は声からして少女らしかった。

少女は一度ノーヴェの方へと顔を向ける。

「9?……あっいえなんでもないわ。本当にごめんなさいね」

そう言っただけ少女は早足で路地から抜けていった。

「ノーヴェ、今のは」

「うん、知ってる人……いや、人形だね」

「そっか人形か。右腕が義手だったんだがそいつで間違いないのか？」

「義手？じゃあ違うのかな？でもあの服装と声はどう考えても……」

「まあいっか。ほら、そろそろ本来の目的の買い物をして帰るぞ。はやく新作に手を出したい」

「……まったくもう。しょうがないなあ」

ノーヴェは震える手を抑え込んで、ロランドに笑顔を見せた。

||*||*||*||*||

「どこへ行く気だ？」

その日の夜、ノーヴェは玄関でロランドに声をかけられた。

「……私はもうここにはいられないから」

ドアノブにかけた手をおろしてノーヴェはロランドの方へ向き直る。

「どういふことだい？」

「私はとあるPMCの所属なの。そして今日会った少女、あの子も同じ。でも私をPMCへ連れ戻そうとはしなかった。つまり考えられるのは——」

「本体の方が何かしらやってPMCから除名されてるとかか。でもそれこそノーヴェには関係ないことだろうか？」

「私たちは戦闘の役目から追われると民生用へ改造されるの。そのときに一切合切の記憶は消えるわ。つまりは体のいい中古品になるの。もちろん働き先も選べない」

「それで、ノーヴェエがここを出ていく理由は？」

ロランドの声が少し荒くなる。しかし、ノーヴェエは気にせず話し続けた。

「人形回収には部隊が投入されるの。私はこの綺麗な街を汚したくないから」

「それで？」

「それでって言われても。これが全部だよ」

「ノーヴェエはそれで満足なのか？ 記憶を失うってことはつまり今のおまえは死ぬんだろ？ おまえは死んでもいいと本気で考えているのか？」

「そりゃ死にたくはないよ！ でも……」

ノーヴェエはうつむく。ロランドは自分らしくないなと考えながらも言葉を続けた。

「死にたくないなら生きろよ！ 他のことなんて考えるなよ！」

ロランドの大声にノーヴェエは身をすくめるが、すぐに言い返す。

「でもどうやって！？ 身寄りもなんもない私に居場所なんて！」

「女の子一人くらいかくまってやるさ！ それくらい俺にだってできる！」

二人の間を長い沈黙が支配する。

「すまない、熱くなりすぎた」

ロランドはそう言って寢室へと戻っていく。

その背中を見ながら、ノーヴェは自分の体温が少し上がったのを計測した。

4・人違い

遅くなってしまうすみませんでした。

朝特有の肌寒さにロランドは目を覚ます。ベッドの方を見ると、そこにノーヴェの姿はない。

ロランドはため息をついて、下の階へと降りる。顔を冷水で洗えば、少しは気持ち晴れた気がした。

身支度を済ませたロランドは、朝食を作り台所へと向かう。冷蔵庫を開けようとしたとき、身に覚えがないメモが貼られていることに気がついた。

「少し出かけます、探さないでください……家出かよ」

メモの下には、小さくノーヴェと書かれている。ロランドは再びため息をついて、朝食を作り始めた。

||*||*||*||*||

今日も売れ行きは順調である。しかし、常連の口からはノーヴェを心配する声漏れ出ていた。

昼時を超えると用意していた分はなくなり、ロランドは店を閉めて買い物に出かけることにした。こういうときは美味しいご飯を食べて気分を変えるべきだというのが、彼の意見だったのだ。

片付けを終わらせて店を出たころには日が傾いており、街が夕焼けに染められていた。

いつも行く食材店へと向かう最中、見覚えのあるパーカーを着た人物が前を歩いているのを見つけた。

その黒地に黄色のインナーカラーのパーカーは、ノーヴェの私服と同じである。

「ノーヴェ？」

ロランドはそう声をかけるが、その人物は振り返ることなく歩いていく。

声が小さくて聞こえなかったのかと思い、ロランドはもう一度大きな声で呼びかける。

「おい、ノーヴェ？」

「もしかしてノーヴェって私のこと？」

振り返った少女は、確かにノーヴェと瓜二つであったが、明らかに違う特徴を持っていた。

右目には眼帯をしており、それでも隠しきれていないほど大きな傷が縦に伸びている。

「ざんねんだけど私はノーヴェって人じゃないわ。それじゃあね」

他人の空似であると思ったのか、彼女はそう行って去ろうとする。

「ああすみません！ えっと……もしかして人形ですか？」

そうロランドが言った次の瞬間、彼は腹に冷たい筒状の何かが押し当てられる感触を感じた。

いつの間にか少女はロランドのすぐ目の前に近づいてきており、ロランドの腹に何かを押し付けている。少女は笑顔のまま、その何かの引き金に指をかけた。

「少しお話したほうが良いみたいね、お互いのためにも」

そう言って路地裏まで押されていく。無力な一般人であるロランドに、拒否権はなかった。

||*||*||*||*||

「それで、どうして私が人形だっと思ったの？」

「それは……君とそっくりな人形と住んでいるからだ。彼女……ノーヴェは戦術人形で、自分の元になった人形がいるって聞いた。だからそれが君のことを言っていたのかなって」

「なるほどね、良かった。どうやら情報が漏れてる訳ではないみたいだし……」
しばらくブツブツと呟いたあと、よしっと明るい声を挙げた。

「そのことは他の人に言っちゃだめだよ？一応私の身元は重要機密ってことに

なってるから。じゃあね！」

「待って！君もこの近くに住んでいるのかい？それなら一度ノーヴェと話し合っ
て——」

「それはできない」

「どうしてだい？」

「もしそのノーヴェという子と会っちゃったら、きっと私の中のウイルスが彼女
を壊しちゃおう」

「壊しちゃうって、それにウイルス？君たちは人形なんだから人間みたいに感
染なんてしないだろう？」

「いいえ、感染するわ。それこそ近くにいなかったとしてもね」

彼女はいたずらに笑みを浮かべる。

「それはいったい——」

「おーい 9？ここか？」

路地裏に男が入ってくる。兵士のような屈強な身体をしているが、足を怪我して
いるようで杖を付いている。

「時間切れだね。またこんど話してあげるよ」

そう言って彼女は男の方へと駆け寄って行ってしまった。そして二言三言話した後、二人は路地裏を出ていった。

その寄り添う二人の姿が、ロランドには仲の良い夫婦に見えた。

5・終了

次の日、ロランドは物音で目が覚めた。昨日ロランドが寝るまではいなかった。ノーヴェエが、ベッドから起き上がった音だった。

「あっ起こしちゃった？ごめん」

「いや、ちょうど目が覚めただけだよ。おはよう」

ロランドは目をそらしながらノーヴェエにそう返した。いつもより少し早い時間だが、たまにはこういう日もあっていいだろうとロランドは起き上がって伸びをした。

洗面所で顔を洗ったロランドはタオルが手元になくことに気がつく。濡れた顔のまま手探りで探していると、手にタオルが当たった。

「はいこれ」

「あっ、ありがとう」

顔を拭いたジョンは、ノーヴェエから目をそらしながら礼を言った。

「いらっしやいませ〜」

ノーヴェの明るい声が店内に響き渡る。昼前だというのにすでに半分以上が捌けており、今日も昼をすぎれば店頭で売切れの札が並ぶだろう。

「ちよつとロランド、こつちをじつと見つめてどうしたの？」

「えっあつなんでもないよ」

ロランドは無意識にノーヴェの働く姿を見ていたようで、さっと目をそらした。

||*||*||*||*||

「それで、どういうつもりなの？」

「えっなんのことかな？」

頬をふくらませるノーヴェからそう声を掛けられて、ロランドは食事の手を止めた。

「今日はずっと目をそらしてばっか。さすがに私でも傷つくんだけど？」

「いや……そのえつと……」

「なに？」

ズイツとノーヴェは食卓越しにロランドに迫る。

「……恥ずかしい」

「えっ？」

「守る力なんてないのに大口をたたいた自分が恥ずかしい」

「……えゝそんな理由？」

ノーヴェは呆れた顔しながら椅子に座った。露骨に避けられているので、何か隠し事をしているのではと予測していた。しかし、実際のところはただの照れ隠しだったようである。

隠し事じゃなくて良かった

ノーヴェは自分の中をよぎった言葉に、疑問を抱く。いったいなぜ、良かったと考えてあのだろうか、と首を傾げる。しかし答えはいつまでたっても求まらない。メンテナンスを受けなければとノーヴェは思った。最近のこの現象を解析できない

いからだ。解決できない問題というのは無駄に負荷がかかり、自分の寿命を縮めてしまふのだ。

しかしメンテナンスを受けるには、それ相応の設備と技術が必要だ。

「ノーヴェ？考え事かい？」

「ああ、うん。そろそろ私もメンテナンスを受けなきゃいけないと思って」

「メンテナンスか……常連に技師がいたっけな。今度できないか聞いてみようか？」

ノーヴェはロランドの提案に首を横に振った。

「私たち戦術人形は民間用と違って機密性の高いプログラムを使っているの。だから民間用人形の技師じゃ無理だよ」

「そうか……それなら力になれない」

ロランドは残念そうにそう呟くことしかできなかった。

||*||*||*||*||

「ごめん、ノーヴェエ！ 買い出しに行ってきたくないか？」

いつもどおり店を開けようとした頃、ロランドが調理場からそう叫んだ。

「了解！ じゃあ行ってきます！」

ノーヴェエは買い物リストを受け取ると、街へと駆けて行った。

「ちょっとそこのあなた、止まって」

ノーヴェエが表通りを歩いていると、突然声をかけられた。辺りを見回してみれば、路地裏のほうへ続く道から手招きされている。

ノーヴェエは平静を装いながら声の主に近づいていく。そして手招きしているその手を掴み、路地裏へ引きずり込んだ。そのまま関節を決め――

――頭を抱えて座り込んだ。

「ああもう、なんでこうピンポイントにダメなことをするかなあ」

声の主の言葉を理解する余裕はなかった。どんどんと知らない情報が頭に入ってくる。新しく入ってきた情報は容量を圧迫し、新しいプログラムがノーヴェエの中心を壊していく。

「はあ、しょうがないか」

蹲ったまま動かなくなったノーヴェエの首元に、声の主は手を這わせる。そして慣れた手付きでパネルをスライドさせ、スイッチを押した。

「ロラ……ンド……」

システムがどんどんと終了していき、彼女の意識は停止へと向かっていく。ノーヴェエは、最後に彼の姿を思い浮かべた。

最後に駆け足になってしまい申し訳ないです。が、書きたかったことは全部書け

たので満足はしています。この話まで読んでくださり、本当にありがとうございます。御座います。今後も短編を数話投稿したいと思っていますので、よろしくおねがいます。

総員！対ショック姿勢！

「ノーヴェ！おおい！いないのか？」

夕暮れで赤く染まる街で、ロランドはノーヴェを探す。なかなか帰ってこない彼女を心配しつつも、仕事をほっぽりだすわけにはいかずにいたのでこんな遅い時間になってしまった。

街の人に聞いても、目撃すらされていない。まるで、何者かに連れ去られてしまったかのようなだった。

「ちくしょう、どこにいるんだよ」

ロランドはそう呟いて、あたりを見回す。ふと目に入った裏路地は、先日の少女に連れ込まれたところと偶然にも一致していた。

「……まさかな」

路地裏へと入っていく。心臓がバクバクと高鳴り、冷や汗がとまらない。

「……ノーズェ？」

そこには少女横たわっていた。見間違えるはずもない。彼女の着ているエプロンには、自分の店の店名が入っている。

「おい！ノーズェ！」

ロランドは少女に駆け寄る。微動だにしない彼女は、まるで電源が落ちているようである。

「そうか！スイッチ！」

ロランドはいつぞやと同様に首のパネルをずらす。そして、起動スイッチを入れた。

「頼む……！おねがいだ！」

「……ロランド？」

「ノーズェ！良かった……」

ロランドは壁に身体を預ける。

ノーヴェは立ち上がり、壁により掛かるロランドへと近づく。

「おい、どうした？」

ノーヴェは何も言わずにロランドへと近づく。そして、彼の顔の横を抜けて壁に手をつく。しかも両腕で彼の顔を挟むようにして、逃げ場を無くしている。

「あの……ちよつと？ノーヴェさん？」

無言で笑顔を浮かべたまま、ノーヴェはゆっくりと顔を近づいてくる。

思わずロランドは顔を引くが、すぐに後頭部が壁に当たる。

身動きがとれないロランドに、ノーヴェはゆっくりと近づいてくる。

唇が離れるまでの時間が、ロランドはとても長く感じた。

ノーヴェは口をゆっくりと開く。

「私ね……ずっと自分の中で違和感があったの。ロランドと会ってからずっと感じてたこの違和感の正体をずっと探してたの」

ノーヴェは優しくロランドに抱きつく。

「やっど…… 9 に会ってやっどわかったの。これが恋ってものなんだね」

耳元でささやくようにそう言われて、ロランドは顔が赤くなるのを感じた。

「ロランド、好きだよ。これからも一緒にいてね」

「……そういうのは男から言うものだろ」

ロランドは、先祖から自分の不甲斐なさを叱られている気持ちになった。

「よし、じゃあ帰ろうか。俺たちの店に」

「うん！」

二人は夕暮れの街へと消えていく。

その二人の後ろ姿を描いた絵が世界を揺るがすほどの評価を得るのだが、それはまた別の話である。

そうです、書きたかったのはこの部分です。

北区の店主【完結】

著者 畑渚

発行日 2019年8月25日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/172933/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
